小説を書く視点とメタ認知―生成AIに聞く

質問１―小説家が小説を書く時、誰の視点から書くものですか。

**ChatGPT:の回答**

良い質問ですね。小説を書くときの「視点（point of view）」にはいくつかの代表的なパターンがあり、必ずしも「主人公の視点」に限定されるわけではありません。大きく分けると次のようになります。

**1. 一人称視点**

* 「私」「僕」「俺」「わたし」などで語られる。
* 語り手（＝一人称の「私」）が体験したことしか描けないので、情報は限定的。
* 主人公自身が語り手になる場合が多いが、**主人公以外の登場人物が語り手になる**こともある（例：『シャーロック・ホームズ』シリーズで語り手はワトソン）。

**2. 三人称限定視点**

* 「彼」「彼女」といった形で描写。
* 作者が「カメラ」のように一人の人物に寄り添って、その人物の見聞・感情だけを描く。
* 主人公に寄り添う場合が多いが、章ごとに別の登場人物の視点に切り替わる小説もある。

**3. 三人称全知視点（神の視点）**

* 語り手（＝作者）が全てを知っている立場で語る。
* 登場人物たちの思考や背景、未来の出来事まで自由に語れる。
* 昔の文学（トルストイや夏目漱石の『坊っちゃん』冒頭部分など）によくある。

**4. 二人称視点**

* 読者に直接語りかける形式。「あなたは今、部屋に入った…」のような描写。
* 実験的な作品やゲーム的な小説で使われることが多い。

**まとめると**

* **主人公の視点**から書くのが最も一般的。
* ただし作者が誰の視点に立つかは自由で、物語の性格や表現したいテーマによって選ばれる。
* 視点選びは「読者にどんな距離感で物語を体験させたいか」に直結する大事な技術。

ご希望なら、同じ場面を **一人称／三人称限定／全知視点** で書き分けて、違いを比較してみますか？

質問２　はい、お願いします。

回答―では、同じ「試験前夜、机に向かう場面」を、**一人称／三人称限定／三人称全知** の3パターンで書き分けます。

**① 一人称視点**

ノートを開いたけれど、どのページも頭に入っていないことばかりが目につく。胸がざわついて、落ち着かない。あと数時間で試験が始まる。深呼吸をしてみたけれど、指先の震えは止まらなかった。

**👉 「私」の体験だけ。主観的で生々しい。**

**② 三人称限定視点（太郎に寄り添う）**

太郎は机に向かい、ノートを開いた。ページをめくるたびに、理解できていない部分ばかりが目に飛び込んでくる。胸の奥がざわつき、落ち着かない。あと数時間で試験が始まるのだ。深呼吸をしようとしたが、指先の震えは止まらなかった。

**👉 語り手は外部にいるが、太郎の「見えること・感じること」しか描写しない。読者は太郎の心に同化しやすい。**

**③ 三人称全知視点（神の視点）**

太郎は机に向かっていた。ノートを開くたびに不安が募り、指先が小刻みに震えている。彼はそれを勉強不足のせいだと思っていたが、実際には数年前の失敗体験が心の奥に影を落としていた。
その頃、母親は隣の部屋で太郎の好きなお守りを探していた。彼女はそれを机にそっと置こうと考えていたが、太郎はまだ気づいていない。そして太郎は、翌日の試験で偶然にも得意分野が出題されることを、もちろん知る由もなかった。

**👉 語り手は太郎の内面の理由、他人の行動、未来までも自由に語れる。読者は物語を俯瞰的に眺める。**

**まとめ（比較表）**

| **視点** | **語りの範囲** | **効果** |
| --- | --- | --- |
| 一人称 | 語り手＝主人公。自分の見聞・感情だけ。 | 主観的・没入感が強い |
| 三人称限定 | 語り手は外部だが、特定の人物（主人公）の知覚に限定。 | 客観性と没入感のバランス |
| 三人称全知 | 語り手が全員の心情・背景・未来を知っている。 | 俯瞰的・解説的・メタ認知的効果 |

質問３―３人称全知視点（神の視点）とは、メタ認知（高次の視点から見る）から見るということですか？

**ChatGPT:の回答**

いいところに目をつけられましたね。
「三人称全知視点（神の視点）」と「メタ認知（高次の視点から見る）」は、似ているように感じられますが、性質は少し異なります。

**1. 三人称全知視点とは**

* 小説における「語りの技法」。
* 語り手（ナレーター）が **登場人物すべての心情・過去・未来・背景** を知っている。
* 例：

太郎は胸を張っていた。しかし彼の心は不安でいっぱいだった。花子はその不安を見抜いていたが、あえて黙っていた。二人とも、この後すぐに訪れる運命を知らなかった。

→ 語り手は「人物が知らないこと」までも自由に語れる。

**2. メタ認知とは**

* 心理学・教育学で使われる概念。
* 自分自身の認知（考え・感情・学習過程）を、**もう一段上の視点から客観的に捉えること**。
* 例：
	+ 「自分は今、不安になっている」
	+ 「この問題は理解できていないから、別の方法で考えよう」

→ 自分の心や思考を外から眺める「自己モニタリング」。

**3. 両者の違いと共通点**

* **共通点**：どちらも「高いところから見ている」という感覚がある。
* **違い**：
	+ 三人称全知視点＝**物語の外部からすべてを知るナレーターの立場**
	+ メタ認知＝**自分自身を対象化して理解する内面的な働き**

**4. まとめ**

三人称全知視点は「物語の技法」、メタ認知は「心の働き」。
ただし、比喩的に「神の視点＝メタ認知的」という言い方はできます。つまり、作家が全知視点を使うときは「登場人物たちを客観的に見下ろす」ので、読者にとっては **自分の感情や状況を俯瞰して見るメタ認知的な体験** に近い効果を生むことがあります。

ご興味があれば、同じ場面を「三人称限定視点」と「三人称全知視点」で書き分けてみて、**どちらがより「メタ認知的」に感じられるか** 比較してみますか？

**質問４―**お願いします。

**ChatGPT:の回答**

では、短い場面を **三人称限定視点** と **三人称全知視点** の二つで書き分けてみますね。
場面設定は「試験前夜、主人公の太郎が机に向かっている」としましょう。

**① 三人称限定視点（太郎に寄り添う）**

太郎は机に向かい、ノートを開いた。ページをめくるたびに、頭に入っていないことばかりが目につく。胸の奥がざわつき、落ち着かない。あと数時間で試験が始まるのだ。彼は深呼吸をしようとしたが、指先の震えは止まらなかった。

👉 太郎の「見えること」「感じること」だけが描かれる。読者は太郎と同じ不安を体験する。

**② 三人称全知視点（神の視点）**

太郎は机に向かっていた。ページをめくるたびに不安が募り、指先が小刻みに震えていた。彼は自分が落ち着かない理由を勉強不足だと思っていたが、実際には過去の失敗体験が心の奥に影を落としていたのだ。
その頃、隣の部屋では母親が太郎を気づかってお守りをそっと机に置こうとしていた。けれど太郎はその存在にまだ気づいていない。そして彼は、翌日の試験で偶然にも最大の得意分野が出題されることを、もちろん知らなかった。

👉 語り手は太郎の心の奥や、太郎の知らない周囲の出来事、さらには未来まで語れる。

**違い**

* **限定視点**：太郎の「主観的な不安」だけ。→ 読者は当事者感覚。
* **全知視点**：太郎の「不安の背景・母の行動・未来」まで。→ 読者は俯瞰的・メタ認知的に状況を理解できる。

つまり、三人称全知視点は「メタ認知的な読者体験」を作りやすい技法なんです。

**質問５―**2人称限定の視点の小説もありますか。

**ChatGPT:の回答**

はい、あります。かなり珍しいですが、「二人称限定の視点」を用いた小説も存在します。

**1. 二人称視点とは**

* 語り手が読者を「あなた」と呼びかけ、**読者自身が主人公になったように物語を進める**形式。
* 例：「あなたは暗い部屋に入っていく。心臓が早鐘を打っている。」
* 読者に強制的に体験させるので没入感が強い一方、「作者から命令されている感じ」がして読みにくいと感じる人も多いです。

**2. 限定型の二人称**

「全知」的にあなたの未来まで決めてしまうのではなく、

* あなたの今見ていること、
* あなたの感情、
* あなたのその瞬間の行動、

だけを描写するスタイル。つまり「二人称限定視点」です。

**3. 実際の作品例**

* **イタロ・カルヴィーノ『冬の夜ひとりの旅人が』**
読者自身が「あなた」として物語を読み進める構造。読書体験そのものをテーマにした実験的作品。
* **ジェイ・マキナニー『ブライト・ライツ、ビッグ・シティ』**
ニューヨークの若者の放埒な生活を「あなた」と呼びかける形式で描いた小説。
* 一部の短編小説やゲームブック、インタラクティブ小説でも多用される。

**4. 特徴と効果**

* 読者が物語に巻き込まれる感覚が強い。
* 主人公と読者をほぼ一致させられる。
* ただし「あなたはそう思った」と書かれると、読者が「自分はそう思わない」と違和感を持ちやすい。
* つまり、「二人称限定の小説」は数は少ないですが、確かに存在していて、特に実験的・ポストモダン的な文学や、ゲーム性のある作品で好まれる形式です。
* ご希望なら、短い場面を **二人称視点** で実際に書いてみましょうか？

**質問５　はい、お願いします**

**二人称限定視点（例）**

あなたは机に向かってノートを開く。目に入ってくる文字はどれも見覚えがあるのに、頭の中に定着していない。ページをめくるたびに、胸の奥がざわつく。ペンを握る手の汗が紙ににじみ、思わず拭う。窓の外で風が揺らしたカーテンの音がやけに大きく聞こえる。
――あと数時間で試験が始まる。そう思うたびに、呼吸が浅くなるのを、あなたは止められない。

👉 ここでは「あなた」が体験していること・感じていることだけを描写しています。
未来や他人の心情などは語らず、「限定視点」にしています。

**二人称全知視点（例）**

あなたは机に向かってノートを開く。胸の奥に不安が広がり、落ち着かない。だがあなた自身は気づいていない――その不安の半分は勉強不足ではなく、数年前に同じように試験で失敗した記憶に縛られているからだ。
窓の外では風がカーテンを揺らしている。その音にあなたは敏感に反応するが、母親が台所でそっと作っている夜食の音には気づいていない。明日、あなたの得意な分野が試験に出題されることも、もちろん今のあなたは知る由もない。

**違いのポイント**

* **限定視点（二人称限定）**
→ あなたの「今この瞬間の感覚と意識」だけ。
* **全知視点（二人称全知）**
→ あなたの「無意識の理由」「他人の行動」「未来の出来事」まで語れる。

つまり「限定」は体験をそのまま読者に押し付けるスタイル、「全知」は読者を「あなた」と呼びながらも上から解説するスタイル、と言えます。

👉質問６―このような作者の視点を中心に小説を解説した評論家は、誰かいませんか。その文献も教えて下さい。

**ChatGPT:の回答**

とても本質的なご質問ですね。「作者の視点（point of view / 視点の技法）」を中心に小説を分析・解説した評論家・理論家は、欧米・日本ともに重要な人物がいます。代表的なものを整理しますね。

**欧米の主要な理論家**

**1. パーシー・ルボック（Percy Lubbock）**

* 著書：*The Craft of Fiction*（1921年）
* 小説の分析を「**point of view（視点）**」という観点で体系化した最初期の人物。
* 「作者の語り方」や「限定／全知」の違いを強調。
→ 「視点論の古典」として必ず参照されます。

**2. ウェイン・C・ブース（Wayne C. Booth）**

* 著書：*The Rhetoric of Fiction*（1961年）
* 語り手を「**implied author（暗黙の作者）**」という概念で捉え直した。
* 「信頼できる語り手」「信頼できない語り手」という分析枠組みを提示。
→ 視点だけでなく、作者と読者の関係まで含めて考察。

**3. ジェラール・ジュネット（Gérard Genette）**

* 著書：*Discours du récit*（1972年、英訳 *Narrative Discourse*）
* 「物語のレベル」と「視点（focalization）」を厳密に区別。
* 全知的語り・限定的語りを「内的焦点化」「外的焦点化」などの用語で整理。
→ 現代ナラトロジーの基本的枠組み。

**日本の文学研究者**

**1. 小林秀雄**

* 評論では「作者の意識」と「語りの姿勢」を重視。理論というより文学的直感に近い。

**2. 丸谷才一**

* 小説技法を解説する評論多数。とくに視点や語りの技術に言及。

**3. 蓮實重彦**

* 『物語批判序説』（1977年）などで小説の語りを精緻に分析。ジュネットの理論を日本に紹介した重要人物。

**4. 柄谷行人**

* 『探究Ⅰ』（1986年）などで「語り手」や「主体」の問題を哲学的に扱う。

**参考文献リスト（邦訳のあるもの）**

* パーシー・ルボック『小説の技巧』（みすず書房）
* ウェイン・C・ブース『フィクションの修辞学』（岩波書店）
* ジェラール・ジュネット『物語のディスクール』（水声社）
* 蓮實重彦『物語批判序説』（新曜社）
* 丸谷才一『忠臣蔵とは何か』（新潮社）※小説技法の評論的部分あり

**まとめ**

* **「視点」という技術を理論的に確立したのはルボック。**
* **語り手や作者像まで広げたのはブース。**
* **焦点化の厳密な整理をしたのはジュネット。**
* 日本では蓮實重彦がジュネットを紹介しつつ展開。

フォームの始まり

フォームの終わり